

山居倉庫は日本一!! 米都酒田を支えた米券倉庫

令和3年4月10日(土)～6月21日(月)

令和3年3月26日、128年の歴史を持つ現役の米穀保管倉庫であり、酒田を代表する観光スポットとして知られる山居倉庫が、国の史跡に指定されました。

明治26年(1893)に株式会社酒田米穀取引所の付属倉庫として建設された山居倉庫は、入庫米に対して「米券」を発行した「米券倉庫」でした。戦前までの日本では、この米券を売買して米取引を行っていました。

米券制度が始まったのは藩政時代のこと。米の品質管理や検査を徹底した庄内藩の米札(米券)は高い信用を得て、米どころ庄内の名を全国に広めました。その技術と精神を受け継いだ山居倉庫の米券は、日本でもっとも有名な米券になりました。

戦中戦後の食糧制度や農地改革により農業倉庫に変わりましたが、現在も設立当初の姿をとどめ、近現代の日本の米穀流通を知るうえで重要な倉庫と位置付けられています。

本企画展では、山居倉庫設立に至る歴史的背景を交えながら、米券倉庫時代の山居倉庫や当時の米穀取引に関する貴重な資料を紹介します。

山居倉庫の源流 べいけん 庄内藩の米券制度

「米券制度」による米の流通を確立した庄内藩

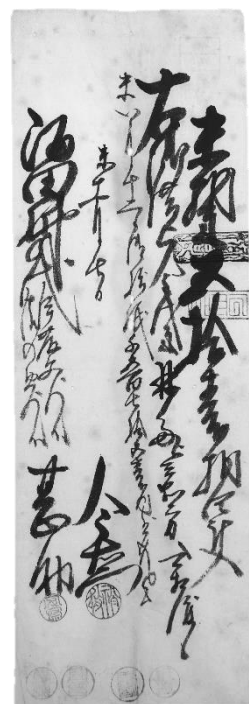
庄内平野を後背地とし、古くから米の積み出し港として機能していた酒田。経済が米を中心に動いていた江戸時代、新井田川沿いには庄内藩をはじめ最上川流域の諸藩の年貢米を納めた蔵が並び、現在の日和山公園の所には、河村瑞賢が整備した西廻り航路で運ばれた幕府御城米を保管した御米置場が置かれ、全国屈指の米の港として栄えた。

主力産業として農政に力を注いだ庄内藩では、米の流通を円滑に行うための制度改革にも取り組んだ。その基礎となったのが、酒井家の入部から間もない寛永元年(1624)に、郡代・柴谷武右衛門しばやぶうえもんが創始した「米券制度」である。その内容は、家臣の禄米(給与の米)を米札(米券)で支給し、年貢米は酒田や鶴岡などの蔵に収納。いつでも米札を米に交換できるというものだった。米札は米の売買にも利用され、貨幣同様に扱われた。

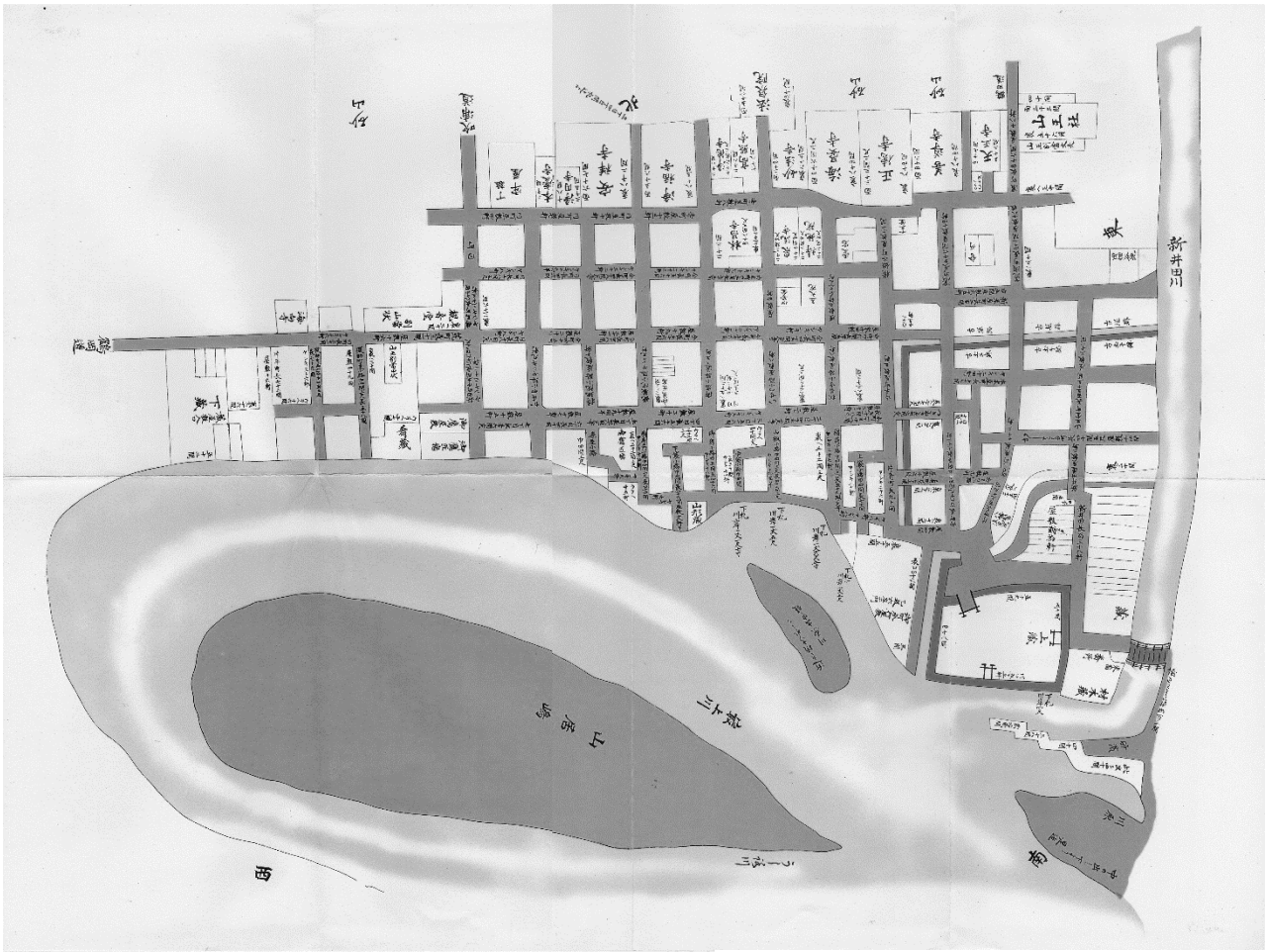
明暦2年(1656)には米の売買を円滑に進めるために、米価の相場を決める米相場所(※)を設けた。また入庫米の検査や品質管理、俵装(俵詰め)を徹底して行った結果、庄内米は高い評価を得て、庄内藩の米札は堂島など全国の市場に流通した。

庄内藩が整えた米札による米取引の仕組みは、株式会社酒田米穀取引所とその付属倉庫である山居倉庫に受け継がれ、山居倉庫は「米券倉庫」としての地位を高めていくことになる。

※米相場所…時代によって歩座方、米会所などさまざまな呼び名がある。



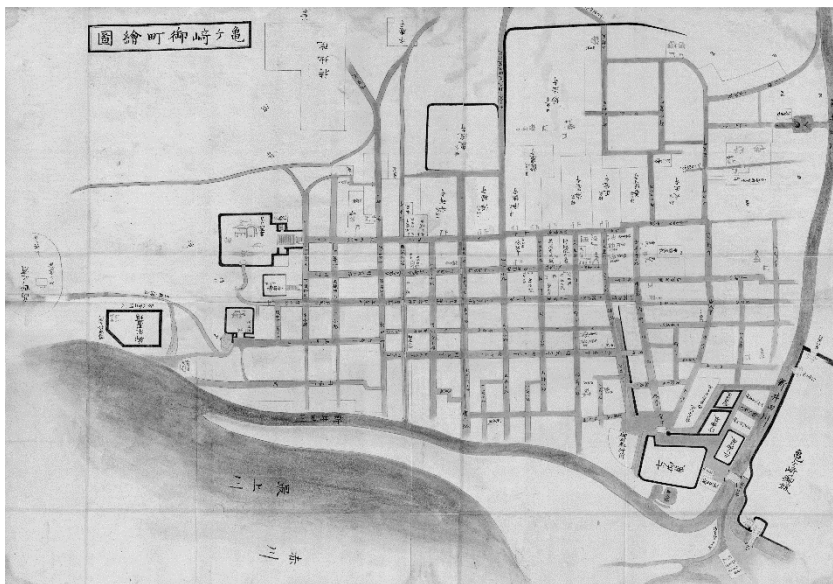
藩政時代の酒田の米札



酒田町絵図／明暦2年(1656) 『飽海郡誌』より

現存する酒田の町絵図では最も古く、明暦2年の大火による焼失範囲を記録した絵図。この当時、酒田に置かれていた上蔵(新井田蔵)、山形蔵、下蔵が描かれている。上蔵と下蔵は庄内藩の米蔵、山形蔵は山形藩の蔵である。

下蔵は、寛文7年(1667)に筑後町に移ったが、さらに同12年(1672)に新井田の上蔵の近くに移った。これらの蔵をまとめて新井田蔵と呼んだ。



亀ヶ崎御町絵図／江戸時代後期

寛政9年(1797)～文政5年(1822)の間に作られた絵図。

新井田川沿いにある七ツ御蔵は上蔵のこと。三ツ御蔵、六ツ御蔵と合わせて新井田蔵と呼んだ。山形蔵は明暦2年の町絵図と同じ場所にある。西側(左)には、幕府の御城米を保管した「御米置場」がある。現在は日和山公園になっている。

絵図には描かれていないが、新井田川沿いには、最上川流域諸藩の蔵宿を勤めた商人たちが営む蔵

なども並んでいた。蔵入れする米を運ぶ舟が行き来する酒田の町は活気に満ちていたことだろう。

明治の米券倉庫 山居倉庫の誕生

明治維新後の混乱を乗り越えて誕生した山居倉庫

明治時代になり、年貢制度が廃止され地租の金納制が始まると、藩政時代のような厳重な品質管理が行われなくなり、粗悪米が出回るようになる。庄内米も例外ではなく市場での評判を落とした。

また米相場所が閉鎖され(※)米価の基準価格が失われたことにより、経済に混乱を招き、庄内の地主や米穀商にとっても死活問題となった。

この状況を克服するため、庄内の地主有志は米穀改良組合を組織し、明治20年代になると乾田馬耕の導入を進め、本格的な稲作改良に取り組んだ。一方、円滑な米取引の復活を図ろうと、明治7年(1874)に酒田・鶴岡の米商たちが「酒田米会社」を設立、同10年(1877)には酒田の廻船問屋が共同で廻漕会社を設立するなどの動きがあったが、成功には至らなかった。

明治19年(1886)、旧藩主・酒井家が全額出資して経営に当たった株式会社「酒田米商会所」が創立。新井田倉庫を保管倉庫として、藩政時代のように厳格な品質管理を行い、事業はしだいに軌道に乗った。明治26年(1893)、付属倉庫を持つことを許可する「取引所法」が公布されると、米商会所は「株式会社酒田米穀取引所」として再出発し、同年11月にその付属倉庫として「山居倉庫」が誕生した。

※米相場所の閉鎖…明治政府は戊辰戦争後の米価高騰の一因が先物取引にあると見て、米の投機的取引を禁止。しかし、2年後には国内最大の米市場であった堂島米会所が再開された。



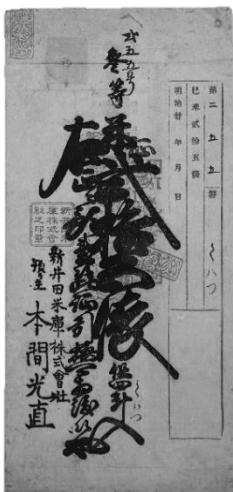
本間家が倉庫業を営んだ新井田蔵／明治10年代

手前の橋は新井田川にかかる新井田橋。その奥に見えるのが、藩政時代に年貢米を納めていた新井田蔵の一部である。

新井田蔵は明治時代になると県の所有となる。その後、酒田の廻船問屋が共同で設立した廻漕会社の倉庫として使われたり、東田川郡の豪農・渡辺作左衛門が買い取って倉庫業を営んだりしており、所有者は転々とした。

明治19年(1886)、同15年に倉庫業を始め

ていた本間家がここを買い取って米穀保管庫に使用し、同25年には「新井田米庫株式会社」を発足した。明治27年(1894)の庄内地震で焼失したが、新たに倉庫5棟を新築。作徳米(小作米)を収容して米券を発行した。



新井田米庫株式会社 米券／明治25年(1892)頃

明治17年(1884)、産米の改良に取り組んでいた庄内三郡の篤農家有志が「庄内米改良法及預ヶ方申合規則」を作り、本間家の下蔵を指定倉庫とした。本間蔵では同19年(1886)に「庄内改良米及ヒ庄内精選米預り定則」を定め、入庫米に対して厳しい検査を行い、品質管理を徹底した。この年、新井田倉庫に拠点を移し、明治25年(1892)に新井田米庫株式会社となった。発行された米券は信用を得ていた。

酒田米商会所(酒田米穀取引所)では新井田倉庫を保管庫に指定し、山居倉庫設立後はその品質管理方法を継承。山居米は高い評価を得ることとなった。



酒田米商會所 創立證書 定款 申合規則／明治18年(1885)

酒田市教育委員会提供

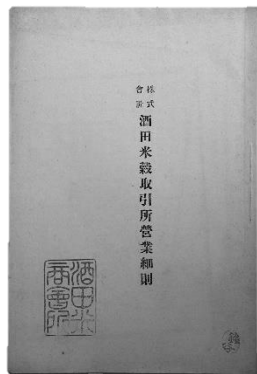
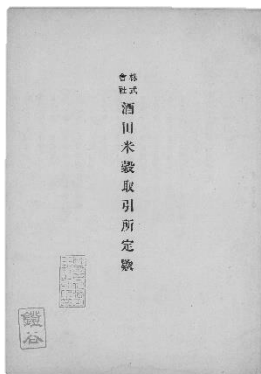
酒田の商人たちが設立を目指した株式会社「酒田米商會所」の定款。明治17年(1884)に農商務大臣の認可を得たが、株式の募集に応じる人が集まらず、発起人たちの足並みも乱れ開業に至らなかった。



酒田米商會所 定款 申合規則／明治24年(1891)

酒田市教育委員会提供

旧藩主・酒井家を中心となって明治18年に再出願し、翌年認可を得て開業した米商會所の定款。この米商會所が、明治26年(1893)の取引所法公布により、「株式会社酒田米穀取引所」として再発足することになる。



株式会社酒田米穀取引所定款と營業細則

／明治26年(1893)

酒田市教育委員会提供

營業細則には、前身の酒田米商會所の印がある。

山居倉庫の建設工事について

山居倉庫が立っている場所は、かつて「山居島」と呼ばれた最上川の中州で、ちょうど新井田川との合流地点になっていた。江戸時代後期の河川改修工事によって、鶉渡川原村(現在の亀ヶ崎地区周辺)と地続きになった。

当時まだ鉄道が通っておらず、米の大量輸送には船を使っていたので、酒田港に近いこの場所が選ばれた。しかし少しの雨でも浸水する低湿地帯だったため、敷地6,348坪(約20,948㎡)に、高さ約3.6mの盛り土をした。土砂は宮野浦や祖父山砂丘(現在の中央東町・中央西町の辺り)から運び込み、盛り土の周囲は傾斜45度の石垣で固めた。さらに地盤を強くするため、各倉庫の礎石の下に長さ2間(約3.6m)の丸太杭を打ち込んだ。

令和元年度に酒田市教育委員会が実施した発掘調査では、盛り土の下の地面まで穴を掘り、現在の地面(石垣の上部)までの高さが、盛り土とほぼ同じ3.4mあることが確認されている。



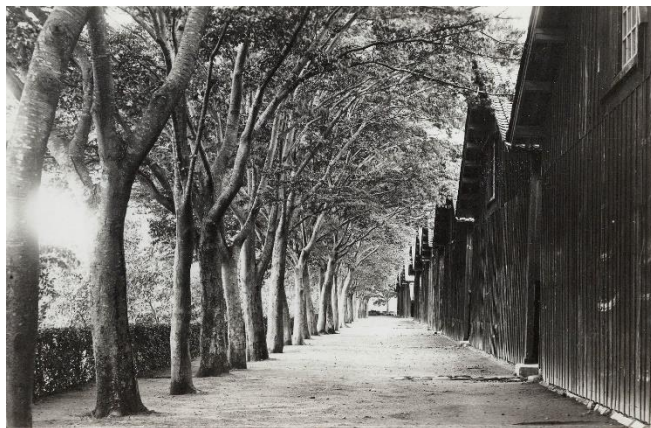
米の品質を保つために倉庫に施された工夫

◇二重構造の屋根(置屋根)にすることで空気の通りをよくし、倉庫内に積み重ねた俵にこもった熱を逃がすとともに、屋根からの伝導熱を防ぐ。

◇倉庫内の湿気対策として、土間は苦塩汁で厚さ2尺(約61cm)の三和土にし、さらに土間の上に塩を1寸(約3cm)の厚さで敷き詰めた。

◇各倉庫の周囲に深さ3尺(約90cm)、幅5尺(約150cm)で掘り下げ、その中に砂利を入れてネズミの害を防いだ。

◇風と日差しから倉庫を守るために、海側にケヤキ並木を植栽した。



山居倉庫の入庫風景
大正14年(1925)



保管米の出庫風景
大正14年(1925)

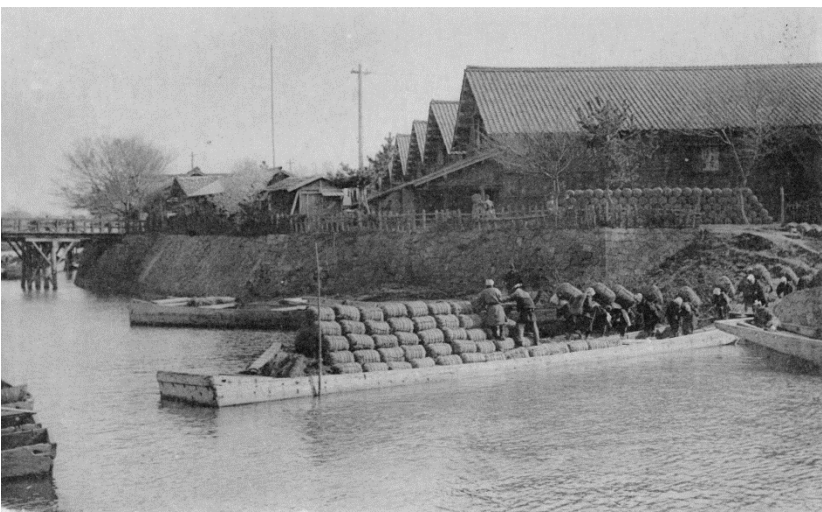
山居倉庫では、終戦後に労働基準法が施行されるまで、「女丁持」と呼ばれた女性たちが米俵を運ぶ作業に当たっていた。



入庫米の検査風景

大正14年(1925)

厳しい検査を行い、品質の高い米を出荷した山居倉庫。明治44年(1911)、山形県では産米の改善を図るために「山形県輸出入米検査規則」を施行したが、その前年に検査員を養成するための「山形県米穀検査講習所規程」を制定し、山居倉庫内に講習所を設置。山居倉庫の職員が指導に当たった。



酒田山居倉庫と輸出入米の状況

(明治時代末期の絵はがき)

県外に出荷する米の搬出風景。女丁持が1俵ずつ運んだ米俵が、小鵜飼舟に整然と積み上げられていく。山居倉庫から新井田川を下って酒田港へ運び出される。

山居倉庫綱領

一 山居倉庫ハ徳義ヲ
 本トシ専業ヲ経営シ
 テ以テ天下ニ模範ヲ
 ラントス
 一 山居倉庫ノ目的ハ
 荘内米ノ改良ヲ図リ
 地方ノ福利ヲ厚クシ
 以テ国家ニ報スルニ
 アリ
 一 山居倉庫員ムハ己ヲ
 正シクシ親切公平ヲ
 旨トスヘシ
 一 米ノ取扱ハ常ニ神ニ
 祈請スル心ヲ以テス
 ヘシ
 一 職責ヲ重シ上下力ヲ
 協セ克ク勤メテ怠ル
 コト勿レ

山居倉庫綱領

創業時から山居倉庫の経営を精神的に支えてきたのが、この綱領である。加藤省一郎著『臥牛 菅実秀』によると、旧藩主酒井家の重臣で、酒田米穀取引所の創立にも尽力した菅実秀が、山居倉庫の幹部・職員に与えた教訓を集約し、大正2年(1913)に成文化したと書かれている。

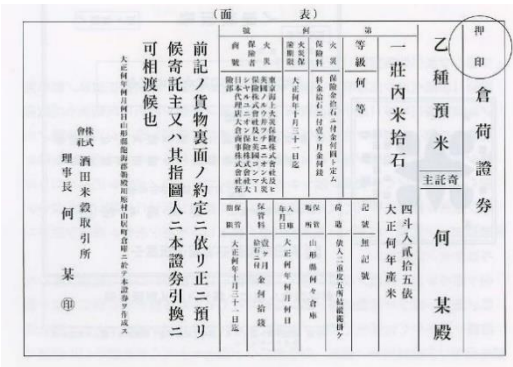
日本で最も有名な米券となった山居倉庫の倉荷証券

山居倉庫では、米の品質と容積を統一するために、入荷米をすべて混合してから、一等から三等の等級に分けて4斗入(60キロ)の俵に詰め直す「混合斗立」という方法をとっていた。その年の豊凶によっては、等級を特等米から四等米までに増やすこともあった。

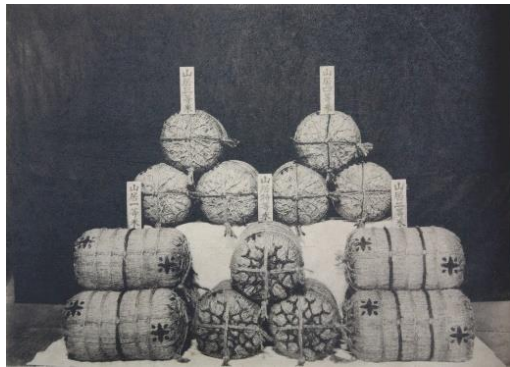
俵は二重包装に統一し、黒縄を締めて「山居米」であることを示した。

厳重な品質検査と俵装、保管方法の改善に努めた結果、山居米の評価は高まり、山居倉庫の倉荷証券は日本一有名な米券になった。銀行の担保物件としても流通し、大正4年(1915)には日本銀行の指定倉庫になっている。

山居倉庫の取り組みは、米券倉庫の成功例として全国に伝わり、県外の米穀倉庫設立にも大きな影響を与えた。



山居倉庫の倉荷証券(米券)の様式
「山居倉庫文化財調査報告書」より



等級別俵装。一等米は黒縄1本、二等米は黒縄2本が目印になっている。

米穀取引所と仲買人

国の認可を得なければ就けなかった「仲買人」の仕事

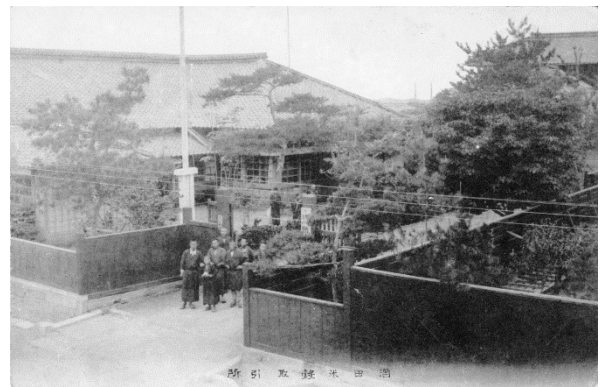
山居倉庫の母体である酒田米穀取引所。本町通りの突き当たり、現在の酒田地区広域行政組合消防署の所にあった。

米穀取引所の役割は、米の流通を円滑・迅速に行い、米価を適正に保つことにあった。正米(現物の米)の取引も行っていたが、代金をすぐに支払わず一定期間をおいて決済する「延取引(先物取引)」が主体となっていたので、投機的取引(※)の側面もあった。

取引を行う仲買人になるには、農商務大臣の認可を得て、法律で定めた身元保証金(酒田米穀取引所創立当初は1,000円)を支払わなければならない、だれでも就けた職業ではなかった。酒田米商会所時代の仲買人は、三十六人衆の流れをくむ西野長、鏡谷惣太郎、幕末以来の豪商である阿部久作、荒木桑太郎の4人。酒田米穀取引所として再発足すると、鏡谷、阿部など13人が仲買人となったが、その顔ぶれはひんぱんに変わっている。

酒田の仲買人は、米の作柄や在庫の量、社会情勢、消費動向、大阪や東京の米穀取引所の値動きなどを考慮しながら取引を行い、米価の相場を決めた。月末になると、売買された山居倉庫の倉荷証券(米券)の受け渡しが行われた。

※投機的取引…取引の目的物(この場合は米券)の受け渡しをせず、相場の変動で生じた差額で利益を得ることを目的とした取引。現在でいうマネーゲーム。



酒田米穀取引所仲買人一覧表 『酒田市史』(旧版)より

| 就 業 | 退 業 | 氏 名 | 就 業 | 退 業 | 氏 名 |
|----------|----------|----------|----------|-----------|----------|
| 明治 26. 9 | 明治 36. 6 | 鏡 谷 惣太郎 | 明治 31. 8 | 明治 45. 5 | 荒 木 十一郎 |
| " | | 荒 木 彦 助 | " 35. 9 | 大正 3. 12 | 二代 阿部 久作 |
| " | " 35. 6 | 初代 阿部 久作 | " 36. 11 | 昭和 8. 12 | 宮 本 辰 也 |
| " | " 28. 1 | 佐々木長右工門 | " 40. 2 | 明治 45. 5 | 佐 藤 善 吉 |
| " | " 28. 9 | 小 竹 鈔三郎 | " 45. 7 | 大正 11. 2 | 根 上 善 造 |
| " | " | 山 村 良 助 | 大正元. 10 | 昭和 5. 7 | 横 山 安之助 |
| " | " 45. 5 | 斎 藤 文 治 | " | " 6. 7 | 佐 藤 猪之助 |
| " | " 31. 4 | 高 山 藤治郎 | " 元. 11 | 大正 3. 8 | 古 屋 太 七 |
| " | " 29. 5 | 瀬 尾 卯右工門 | " 2. 1 | " | 安 田 其 吉 |
| " | 大正 5. 6 | 木 村 茂 三 | " 3. 5 | | 荒 木 幸 吉 |
| " | 明治 31. 5 | 柴 田 正八郎 | " 3. 8 | 昭和 6. 2 | 荒 木 十一郎 |
| " | " 27. 12 | 菅 原 文 蔵 | " | 大正 9. 8 | 二代 斎藤 文治 |
| " | " 33. 9 | 本 間 長 治 | " 4. 2 | 昭和 11. 4 | 三代 阿部 久作 |
| " 27. 1 | " 28. 9 | 佐 藤 調右工門 | " 7. 3 | 大正 8. 5 | 長谷部 豊 吉 |
| " | " 27. 4 | 小 倉 末 吉 | " 9. 2 | 昭和 7. 6 | 宮 田 熊 蔵 |
| " 27. 8 | " 31. 1 | 鈴 木 修 治 | " 10. 12 | 大正 12. 11 | 佐 藤 善 吉 |
| " 28. 3 | " 32. 6 | 鈴 木 久 弥 | 昭和 2. 2 | | 菅 原 権 吉 |
| " | " 33. 8 | 丸 谷 栄 治 | " 4. 1 | | 古 屋 太 助 |
| " 29. 1 | " 32. 4 | 須 田 万治郎 | " 4. 12 | | 菅 沢 久五郎 |
| " 29. 12 | " 31. 10 | 鈴 木 猪太郎 | " 6. 7 | 昭和 11. 9 | 佐久間 作太郎 |
| " " | " 30. 10 | 渡 部 藤太郎 | " 6. 11 | " 12. 3 | 佐 藤 三 郎 |
| " 30. 6 | " 31. 12 | 朝 井 寅 吉 | " | | 渡 部 専 吉 |
| " 30. 11 | " 31. 3 | 林 宗 治 | " 7. 4 | | 佐 藤 栄 吉 |
| " " | " 32. 1 | 渡 部 孝之助 | " 7. 12 | | 加 藤 惣 七 |
| " 30. 12 | " 31. 3 | 保 科 藤四郎 | " 8. 8 | | 本 間 光 勇 |
| " | " 31. 4 | 宮 田 熊 蔵 | " 8. 11 | | 宮 本 貞 治 |
| " 31. 2 | " 39. 3 | 須 田 新三郎 | " 9. 9 | | 梅 木 清 |
| " 31. 4 | " 32. 3 | 斎 藤 軾 | " | | 近 藤 嘉太郎 |
| " " | " 32. 4 | 佐 藤 卯之助 | " | | 渡 部 万 吉 |
| " 31. 7 | " 31. 11 | 渡 部 豊 治 | " 10. 8 | 昭和 12. 10 | 卯 月 啓 助 |
| " " | " 31. 12 | 佐 藤 善 吉 | " | | 村 上 与一郎 |

退業年月の記載がない仲買人は、昭和 14 年に米穀取引所が廃止されるまで営業していたと考えられる。

鏡谷家が米穀取引所との間に引いた電話／明治時代

酒田に電話局ができる以前、酒田米商会所時代の明治 24 年(1891)に、鏡谷家が会所との間に引いた私設電話。ほとんど離れていない場所にあるのだが、わざわざ電話でやりとりをしたほど、「待ったなし」の判断が必要されたのだろう。



酒田で米相場を語る時に忘れてならないのが、「相場の神様」と呼ばれた本間宗久である。

本間家初代・原光の五男に生まれた宗久は、商才に恵まれ、甥・光丘の後見役として家業を発展させ、米相場で富を得たが、家督を継いだ光丘に絶縁される(後に復縁)。

江戸に出た宗久は相場で失敗。ひそかに酒田に戻って海晏寺住職に教えをこい、7日間の座禅の末に得た答えをもとに編み出した相場法「三位の法」で連戦連勝したといわれている。その後、江戸上野の寛永寺住職である輪王寺宮(皇族)の家臣となり、根岸に住んだ。

宗久は、本間家に入入りしていた中町の搦屋善兵衛に相場法を教え、秘伝書を授けたという。相場に失敗し貧乏暮らしをしていた善兵衛を哀れに思っていたことだった。

宗久の秘伝は、善兵衛から鶴岡の酒造家・葛岡五十香に、葛岡から同じ鶴岡の石川善兵衛へと伝わった。その弟子となった船場町の早坂豊蔵は、宗久から数えて5代目の子孫・加藤古作から宗久の秘伝書の写しを借り、明治27年(1894)に『莊内本間宗久翁遺書』を出版。ほかにも何冊かを出版している。

宗久が確立した相場法は現在まで伝わり、海外の投資家にも広く知られている。



齋藤八三郎著『期米相場野線学』／明治41年(1908)より
国立国会図書館デジタルコレクション

米券倉庫から農業倉庫へ

米穀流通の歴史を伝える施設として、国の史跡に

大正3年(1914)に酒田駅が開業し鉄道網の整備が進むと、庄内各地に山居倉庫の支庫が建設された。川北には砂越・本楯・遊佐・北俣・一条・田沢、川南には余目・藤島・押切・東栄などの支庫ができ、山居倉庫全体の入庫量は、明治26年(1893)には31,714石だったが、昭和7年(1932)には476,093石まで増えている。

一方、大正6年(1917)に「農業倉庫法」が公布され、産業組合(現在の農業協同組合の母体)などが事業主体となった「農業倉庫」が全国各地につくられる。庄内でもその動きは活発化し、地主・商人の利益を目的とした米券倉庫と、農民自らが集荷から販売を行う農業倉庫の対立は、景気の悪化とともに激しさを増した。

農業倉庫は高いブランド力を持つ山居倉庫に勝てなかったが、昭和12年(1937)の日中戦争開始を機に、国は食糧政策を国家管理に転換。同14年の「米穀配給統制法」公布により米穀取引所は廃止され、米の自由取引は終わりを迎える。山居倉庫は農業倉庫と合体し、連合農業倉庫となって戦時体制に組み込まれていった。

終戦から13年後の昭和33年(1958)、庄内経済連(現JA全農山形)の所有となり、今日まで現役の米穀保管庫として続いている。創立当初の姿をとどめ、近現代の日本の米穀流通の歴史を伝える重要な施設として、今年3月26日に国の史跡に指定された。

財団法人北斗会と山居賃貸倉庫株式会社

昭和14年(1939)、「米穀配給統制法」の施行により、国内の米穀取引所はすべて廃止され、国策会社の「日本米穀株式会社」に引き継がれた。

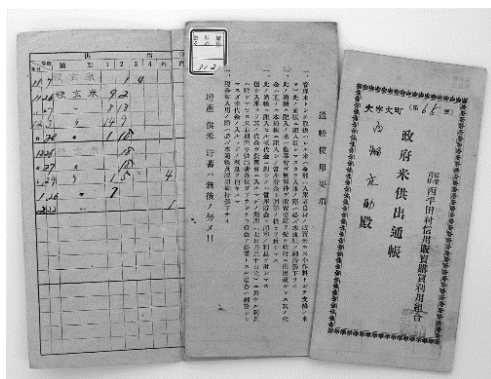
山居倉庫は本庫・支庫のすべてが、農業倉庫米を販売する「山形県購買販売組合連合会」に貸与され、名称は「山形県連合農業倉庫庄内倉庫」となった。倉庫の経営に当たったのが、財団法人北斗会と山居賃貸倉庫株式会社である。

北斗会は、倉庫の貸与にあたり、酒田米穀取引所附属倉庫と合資会社黒瀬倉庫(支庫)の土地及び全施設を寄付財産として設立した財団法人。山居賃貸倉庫は、昭和2年(1927)に酒田米穀取引所の子会社として設立され、倉庫の新增設を行っていた。



山居倉庫からの庄内米の供出を取り上げた戦時中の「写真週報」／昭和18年(1943)2月24日号
戦時中から終戦直後まで実施された米穀供出制度により、農家の自家用米を除くすべての米は、政府により一定の価格で買収された。この記事では模範的な例として、雪の降る真冬に馬そりを使って山居倉庫まで米を運ぶ農民の姿、品質検査の様子が写真で紹介されている。

「写真週報」は、昭和13年(1938)から同20年(1945)の終戦直前まで、内閣情報局が制作した国策グラフ雑誌で、ちょうどこの号が発行された頃から、戦況が悪化の道をたどり始めた。



戦時中に酒田の農家が使っていた供出米の通帳
昭和16~20年(1941~45)

入庫証印の欄には酒田本庫(山居倉庫)のハンコが押してある。通帳裏面には「増産 供米 貯蓄は銃後ノ努メ!!」と印刷されている。



戦後の入庫風景
昭和37年(1962)頃



絵葉書「観光の酒田」昭和30年代



「農業倉庫譲受20周年」

昭和52年(1977) 庄内経済連製作

昭和32~33年(1957~58)にかけて、山居賃貸倉庫株式会社と財団法人北斗会の倉庫は庄内経済連(現JA全農山形)に譲られてから20周年の節目に製作された冊子。

現在の山居倉庫

現在、山居倉庫では9棟、収納能力10,800トン(18万俵)の倉庫が現役の米穀保管倉庫として稼働している。

敷地内には倉庫を利用した酒田市観光物産館「酒田夢の倶楽」と「庄内米歴史資料館」があり、酒田を代表する観光施設としてにぎわっている。樹齢150年を超えるケヤキ35本が並ぶケヤキ並木は、絶好の写真撮影スポットとなっている。

NHK朝の連続テレビ小説「おしん」、昭和の人気刑事ドラマ「西部警察」など、テレビや映画の撮影も行われている。

かつて米を積んだ馬車や荷車がひしめき渡っていた山居橋は、昭和34年(1959)に老朽化などのために解体され、平成5年に現在の山居橋が設置された。



ドラマ「おしん」の撮影風景/昭和57年(1982)